

「6月18日の男」をどのように思い描くか ——アンドレ・マルローとモーリス・ブランショの 見たシャルル・ド・ゴール

有 田 英 也

はじめに

知識人の本分は批判にある。だから、為政者と知識人は折り合いが悪くて当然だろう。為政者は世論が知識人に耳を傾けないように、時に彼らの無力をあざ笑い、時に彼らを御用学者あるいは宮廷人として取り込んでゆく。シャルル・ド・ゴール（1890-1970）という軍人・政治家も、知識人をあからさまに軽侮した点で、こうした為政者の例に漏れない。ところが、20世紀後半のフランス知識人は、ド・ゴールに対峙することで、みずからの存在意義を確かめ、とりわけ言葉と行動の関係を深く問い直した。また、国民投票に敗れて共和国大統領を即刻辞任した彼は、未完に終わった回想録『希望の回想』¹⁾を書きながら、かつての側近アンドレ・マルローに自分がなぜ知識人に嫌われたのかと問うている。ド・ゴールと知識人——その双方には相補的なものがないだろうか。

本論はド・ゴールと知識人との関わりを、ふたつの対照的な視点から考察する。マルローの回想『倒された樫の木』²⁾には政治上の敗者を歴史上の偉人として後世に伝えようとする作家の意志が感じられる。一方、近年、単行本にまとめられて邦訳もされたモーリス・ブランショの1950年代以降の政治評論³⁾には、ド・ゴールの体現する権力を、主権についての、また表現についての「倒錯」として拒否する姿勢が顕著である。

フランス知識人の運動史と思想史は、1958年から1968年5月の騒乱までのド・ゴール時代を概観できるだけの研究蓄積をすでに持っている⁴⁾。だが、個々の作家に即して権力と言葉との関係を問いただす作業は、新たなテキストが読まれるたびに、また新しい観点が提出されるたびに常

に試みられねばならない。それゆえ本論は、為政者の言葉と知識人の言葉が相補的となるようなテキストを選んで分析し、評伝をめざさない。

1 シャルル・ド・ゴールとド・ゴール将軍

シャルル・ド・ゴールは、20世紀中葉のフランス社会が国のまとまりを更新し維持してゆくうえで、決定的な役割を果たした。まず、ド・ゴールは第二次世界大戦におけるレジスタンス運動の主要な担い手のひとりであった。1940年6月17日、国防次官だった彼はベタン元帥らの主張する対独休戦に反対してロンドンに亡命し、翌日、BBC放送を通じて国民に徹底抗戦を呼びかけ、脱走した将兵数千人とともに「自由フランス」を組織した。その後の紆余曲折⁵⁾を捨象してド・ゴールの英雄的役割を抽出したのが、「6月18日の男」としての将軍像である。ド・ゴールは戦後の議会政治に破れて下野していた時に執筆した『戦争の回想 [大戦回顧録]』⁶⁾によって、みずからを神話化した。

次の役割は、アルジェリア問題を解決した救国の英雄というものである。これにはひとつの歴史的事実を強調しておかねばならない。フランス国民議会は首相不在のままおよそ一ヶ月も空転していたが、ついに1958年5月13日、独立容認派のフリムランを首相に選んだ。彼の所属はカトリック系レジスタンス組織を母体とする人民共和運動（MRP）だが、この政党はかつて共産党とともに「フランスのアルジェリア」を固守する議会勢力に呼応して首相マンデス・フランスに不信任を突きつけていた。5月13日はアルジェリア政策の転換を印象づけたはずである。すなわち、「アルジェリア民族解放戦線」（FLN）との武装衝突と重い財政負担に疲れたフランスの統治層と世論は、他の海外領土とは異なり1870年からフランスの三県であったアルジェリアを、インドシナに続いて手放す覚悟を決めつつあったという印象である。この時、アルジェリアで反乱を起こしたコロン（入植者）に現地軍が呼応して公共治安委員会を設立した。そして、都市部ゲリラの掃討（「アルジェの戦い」）で名をはせたマシュー将軍を先頭に、本国でも公共治安委員会政府の樹立を求め、事実上の政界引退をしていたド・ゴール将軍に政権復帰を要請した。これに対してド・ゴールは5月15日、記者会見で政権を担う用意があると語った。つまり、ド・ゴールは、「フランスのアルジェリア」を

死守しようとする勢力から懇請されて「再登場」したのである⁷⁾。ところが、ド・ゴール最晩年の『希望の回想』は、首相就任直後の心境を一人称の「わたし」と三人称の神話的人物とを区別しながら運命をみずからつかんだかのように記す。「ここにわたしは、かつてないほどのあのド・ゴールとなるべく強いられている」(D904)

2 ド・ゴールの政権復帰(1958)の意味

アルジェリア問題が切迫する1958年5月に、元首相シャルル・ド・ゴールが事実上の政権復帰を果たしたことは、フランス知識人の運動史における大きな逆説であった。

第二次世界大戦直後のフランス知識人の状況を概観すれば、レジスタンスの光輝を帯びた新進作家カミュ、『現代』誌をモーリス・メルロー＝ポンティとともに率いた若き哲学者・作家サルトルが颯爽と登場したように、それまでの古典的教養に裏打ちされたヴァレリーやジッドなど1870年前後に生まれた旧世代との交代がなされたと見える。だが、おそらく事実はそうでない。1940年から1953年にかけて作家たちがどのような政治的配置にあったかを、社会学者ブルデューの「文学場」の理論を応用して論じたジゼル・サピロの大著⁸⁾に見るなら、当時のフランスで作家、芸術家、学者、ジャーナリストという伝統的に知識人の母体となった専門職の文筆家の言動は、依然として前世紀末のドレフュス事件によって、いや事件「以後」に定式化された政治的な左右の対立構図に規定されていた。知識人がどのような「知」を基盤として思考するにせよ、彼らの行動の所与はフランス政治の諸制度だったからである。1944年8月末にパリが解放され、9月6日にド・ゴールを首班とする共和国臨時政府が樹立されると、対独協力者裁判法廷が占領ドイツ軍に協力したペタン派を裁き、またレジスタンス系ジャーナリズムが言論諸機関からグレーゾーンの協力者を排除した。作家たちはフランス共産党を一方の極とする左翼と、ド・ゴール派、カトリック、親米派(アトランティスト)らを取り混ぜた多極的保守とが拮抗する状況のもとで次第に自由を失ってゆく。カミュもサルトルも、このような対立構図の中で翻弄されていた。

後述するように、ド・ゴールが「ドゥー＝マゴの感じやすい魂たち」

と揶揄したのは、サン＝ジェルマン・デプレの文壇カフェに集まっていたいわゆる実存主義知識人のことである。そこにはカミュとサルトルがいる。カミュは、戦後のフランスが米英ソに伍する大国として残れるか、それとも中級国に落ち込むかどうかで苦しんでいた1946年という時点で、評論「犠牲者でも死刑執行人でもなく」によって「新たに社会契約を結びなおすこと」を訴えた。サルトルは、共和国が100年前の奴隷解放を自画自賛した1948年に、アフリカ植民地出身詩人たちの選集を評して西欧の横暴を指弾し、遠からぬその没落を予言した。彼らは後のカミュ＝サルトル論争が示すように、社会主義について、貧困について、誰と同盟すべきかについて意見を異にしていたであろうが、少なくとも戦前と違う新しい社会を作る意志を共有していたであろう。そして、ド・ゴールのようにフランスの威信回復を最優先した政治家は、リアルポリティクスを度外視して倫理を振りかざす「知識人」に呆れたのである。彼らはド・ゴールに疎まれたばかりではない。カミュは『反抗的人間』（1951）で「神を歴史で置き換えた20世紀の革命」⁹⁾を批判して、反動主義者の扱いを受けるだろう。フランス知識人は冷戦構造の下での発言を余儀なくされていた。そのうえ、1950年代になると、ベタン政権に対する共感を隠さない作家や、プジャードに代表される初期ファシズムと見紛うばかりの大衆迎合政治家が現れて、サルトルらの振りかざす正義に強く反発した¹⁰⁾。

たしかに、アルジェリア戦争（1954-1962）は、第二次世界大戦後のフランス知識人が、反植民地主義という旗印のもとに運動の自主性を取り戻す契機となった。現在も続く左翼系ジャーナリズムに著名作家が寄稿した¹¹⁾。たとえば、カミュはしばらく遠ざかっていたジャーナリズム活動を『レクスプレス』誌で再開し、アラブ人、フランス人双方で民間人に死者が出ていたことを憂慮して、1956年1月に「理性に対する最後のアペール」を求めて「市民休戦」をアルジェで訴えた¹²⁾。

だが、当時の多くの知識人は、激化するアルジェリアの反植民地闘争に対してフランス軍が行った拷問、そしてゲリラおよび軍の双方による民間人の殺傷に無力感を抱き、言論を非力と感じるようになった。カミュは理解者を得られず沈黙してしまう。それでも1958年5月13日にアルジェリアでフランス軍の反乱が起こり、ド・ゴールが「政権を担う用意がある」と宣言したとき、共和派の知識人は独裁を恐れたはずである。

「6月18日の男」がドイツに対して徹底抗戦を亡命地ロンドンから訴えたのは、すでに18年前の昔だった。だが、ド・ゴールは実際に共和国大統領コティから要請されて6月1日に首相になり、憲法改正を国民投票に訴えて勝利し、第五共和制初代大統領に選出された¹³⁾。「ド・ゴールの回帰」は、フランス大衆が「理性」というよりむしろ「救世主」に頼り、すくなからぬ知識人が將軍の「再登場」を歓迎したという点で画期的だった。

現代フランスの代表的な政治思想史家シリネリとオルリの『フランス知識人の歴史 ドレフェス事件から現代まで』によれば、アルジェリア問題を解決するために超法規的権力を要求したド・ゴールに「驚愕」した知識人は、5月25日に「共和国防衛全国大学評議会」を立ち上げ、5月28日に哲学者のジャンケレヴィッチ、リクールが左翼諸政党および労組とともに、ナシヨン広場からレピュブリック [共和国] 広場まで行進したことに触れる。だが、小党分立と形骸化した大統領権限に特徴づけられ、リーダーシップの希薄な第四共和制の「葬儀」はすでに始まっていた。シリネリとオルリは、ド・ゴール再登場の逆説を、「この政治地図の書き換えには、翌年に起きるイデオロギー上の指標の大変動が加わった。つまり、右翼に位置づけられ、あまつさえ〈クーデタ〉を非難されたひとりの軍人が、[アルジェリア人民による] 自己決定を率先して提案し、以後、〈フランスのアルジェリア〉の唱道者らの敵となり、やがて標的となったのである¹⁴⁾と説明している。

ド・ゴールがいかにしてフランス政治の左右対立の図式を脱臼させたかを、憲法改正案を国民投票に付すさいの演説に見よう。これは1958年9月4日にレピュブリック広場で行われ、ラジオ放送された。1870年のこの日、フランス皇帝ナポレオン3世がプロイセン軍の捕虜となり、パリで国防政府が樹立して第三共和制が始まった。「右翼に位置づけられ、あまつさえ〈クーデタ〉を非難された」將軍は、レピュブリック [共和国] という語に集約される政治的一貫性を、日付と場所によって、そして18年前のあの救国者の声によって国民に印象づけようとした。新憲法案は、有効投票の79.2%の賛成を得て可決された。アルジェリアでは賛成が96%を超え、海外県および海外領土でも93%が賛成票を投じた。アルジェリア人民による「自己決定 (autodétermination)」という提案は、第五共和制初代大統領に選出されたド・ゴールが、1960年11月4日にエ

リゼ宮で行ってテレビ放映された演説で、もはや疑いようのない表現、すなわち「後見解除されたアルジェリア、アルジェリア人がみずからの運命をみずから決定するアルジェリア」「自己決定によって決められる明日のアルジェリア」「アルジェリア人のアルジェリアへの行進」などの言葉を用いてなされた¹⁵⁾。この提案は、政府が1961年4月に四人の將軍の反乱を鎮圧した後、1962年のエヴィアン協定で実現する。

もちろん、周辺アラブ諸国とFLN（アルジェリア国民解放戦線）によってド・ゴールが追い込まれたと見るのがむしろ妥当だろう。ド・ゴールの演説選集を読んでも、アルジェリアの地位についてふらつきがある。だが、最晩年の『希望の回想』では、あたかも「自己決定」がひとつの脳髓から沸き出で、ひとりの軍人政治家がそのために歴史に呼び出され、あたかも神から召命を受けたかのように描かれる¹⁶⁾。そこに誰の示唆も影響もなく、知識人の入り込む余地などありそうもない。

このように、アルジェリア戦争は、それ自体がド・ゴールの政権復帰を生み、ド・ゴールによって終結したという点で、知識人がふたたび、そしてさらに深く、政治に翻弄されてゆく過程の始まりでもあった¹⁷⁾。ド・ゴールの国家運営術がこの過程をよく表している。すでに前述の1958年9月4日の首相演説で、ド・ゴールは知識人を輩出する分野の人々に協力を呼びかけた。「潰れて軽蔑される国民になりたくなければ、わたしたちは科学、経済、社会の分野ですばやく進化しなくてはならない。この不可欠の要請には、フランス人の間で、それも真っ先に若手に現れている進歩への好みと、技術的成果に対する情熱が答えてくれる」¹⁸⁾

両次世界大戦間の古典的教養に裏打ちされた知識人はおろか、戦後の哲学と人文諸科学に依拠する者たちさえ、ド・ゴールが管理運営する進歩的フランス社会に寄与しないかぎり、たちまち過去の遺物とされてしまう。その国家の方向性は、アメリカからの供与を拒んで独自に核武装するために国民の叡智を結集し、サハラ砂漠、次いで南太平洋の核実験施設を確保することで示されよう。ド・ゴールは『希望の回想』でアルジェリア独立を展望しながら、「わたしは国民的野心をどこかよそに向けてやらねばならない」(D950)と述べる。回想記に使われる不思議な現在形は、為政者が国民に語りかける叙法の反復である。言葉を支配するカリスマ的政治家に対して、知識人は新たな運動、新たな言葉を見出

さねばならない。その一方で、ド・ゴールに言葉を備給する文化人も現れる。

3 生きながらにして歴史となるド・ゴール

アンドレ・マルロー（1901-1976）は1930年代に左翼の論客として健筆をふるい、特にスペイン内戦には国際義勇軍に投じて反フランコ陣営で闘い、小説『希望』（1937）を発表した、兩次世界大戦間の時代の代表的知識人である。第二次世界大戦中は、抗独武装レジスタンスに加わり、ベルジェという偽名でアルザス＝ロレーヌ部隊にあった。彼が共和国大統領ド・ゴールの文化大臣を長く務めたことは、たんに左翼作家の右傾というよりも、祖国愛をキーワードにフランス知識人の配置が大きく変わったことを意味している。小論の筆者が覚えているマルローの戯画は、ド・ゴールの肩に乗って、1968年5月革命の学生たちに「文化を守れ」と怒鳴っている反動主義者というものである。

マルローは三度目の逆境¹⁹⁾にあるド・ゴールを1969年12月、コロンの自宅に訪ねた。国民投票に敗れたド・ゴールが辞任するとみずからも大臣を辞したマルローは、『希望の回想』の第一章がすでに書かれていることを知る²⁰⁾。会見のトーンは、夫人も同席し、將軍みずから葡萄酒を注ぐといった親密なものだが（M97）、知識人に対する揶揄は、ケネディ未亡人が「大金持ちのオナシスでなく」「むしろサルトルと再婚すると思っておったよ。あるいはきみとね」（M120）といった一節に見える。

このようにド・ゴールは知識人を侮っていたが、自分の死後、彼の肖像を描くのが作家たちであることも知っていた。それゆえド・ゴールは、第二次世界大戦中の自身とフランス国民の姿を回想録に記したように、アルジェリア問題を自分が解決した1958年から1962年までを物語ることにしたのである。マルローとの会見の目的は、両者にとって後世にどのようなド・ゴール像を伝えるかにあったろう。会見記の終りに近い次の一節に、書き手の意図が透けて見える。

「彼は振り返って雪を見ている。彼はわたしたちの時間に属していない——今日の、彼の仰臥した巨像によく似合う、千年前の過去に属してい

るのだ」(M175/143)

フランス歴代の王族の亡骸は、蓋に写実的な仰臥像を載せた棺に収まり、パリ北部のサン＝ドニ聖堂にあった。長身のド・ゴールの体軀を表す「巨像」という語が選ばれているのは、マルローがこの時点で称賛演説の文体をもって、すでに追悼文を書いているからだろう。ド・ゴール将軍は生きながらにして悠久の時間に属す、と。だが、マルローがド・ゴールの没後に発表した会見記『倒された樞の木』の中で、小論が注目するのは、みずからの歴史的評価を終始気にかけてド・ゴールが、明らかに軽侮していた知識人について言い及んだ箇所である。マルローはド・ゴールの死後を生きる者として、将軍の知識人批判に対して両義的な立場を取っている。

「私は知識人を味方にしたよ、だが彼等は軽業師になってしまった、ちょうど連中がロスバハでフリードリヒ [2世] を称える警句を作っておった時のように。才能はそれほど多くの場合に思想の正当さを保証してくれるわけではない。それに五月のラジオのストライキといたらどうだ！あの重大事に、誰が放送局でフランスのためにストライキをしたというのか！」

「知識人はドゥー＝マゴの客と『ロプセルヴァトゥール』の読者だけではありません」

「彼らでさえかつては私の味方だったのだ。(後略)」(M168/138)

五月とは1968年の大学とルノー工場での異議申し立てに端を発する騒乱のことである。人々が街路で真相を知ろうとするのを牽制し、政権が「真実」と称するものを伝えるのが「フランスのために」マスコミが為すべきことだったと考えるド・ゴールは、ラジオ放送局のストは反フランス的だという。軽業師 (équilibristes) とは、空中ブランコ乗りや綱渡りのように、危ういバランスを保って大向こう受けする作家を揶揄したものである。

マルローはここで、「ドゥー＝マゴの客」、つまりしばしば言及される「感じやすい魂ども」(163-4.172.185.190) と、かつて政敵だったマンデス・フランスを支持した『ロプセルヴァトゥール』を槍玉にあげる宮

廷人ぶりを見せた。そのためマルローは、「それでもド・ゴール派の芸術家が存在します。かつてはブラックとル・コルビュジエ、今日ではシャガールとバルテュス。しかも彼らだけではありません」(M171／140)と口にして、「ゴーストの芸術家とはどういう人だね？」と反問され、「あなたを擁護する芸術家のことです」と答えさせられている。

それではド・ゴールは、知的才能によって得た権威を用いて意見の正当さを訴える知識人が、どういう意味でフランス軍をロスバッハで打ち破った敵国元首を称えたと言うのだろうか。知識人の短慮を罵るド・ゴールの長広舌を引こう。

「私達の感じやすい魂どもは、私が共和国を再建していた時に私をモーラス主義者呼ばわりし、フランス共同体を創設している時には植民地主義者と、アルジェリアに平和をもたらしに行っていた時には帝国主義者と呼んだ。モーラスが共和国大統領を普通選挙で選べるよう奮闘している姿が目につかぶか？ きみは〈右翼〉が国有化と、アルジェリアに対する私の決断と、きみの社会保障制度を喜ぶとでも思うか？ 1958年に、私達はきみもよく知るようにファシストだった。きみは自分が言ったことになっている文句を覚えているだろう、〈決選投票に付されるような独裁制をいつ見たことがあるかね〉と」(M169／139)

ここには世評を気にかける大統領の姿がある。『希望の回想』に見えるド・ゴールは、演説する場所と日付に留意し、遊説回数を誇る一方で、ラジオとテレビによる放送に積極的である。たしかに、放送には、「私は音と映像によって国民の近くにいるが、いくぶん抽象的だ」(D1135)とされるように、カリスマの直接性を減じる要素がある。それは演説者自身にもいえることで、「夕方、見世物が世界中の舞台に現れるが、広大無辺で神秘的な聴衆がどう思っているのかをわたしに知らせてくれる囁きも歓呼もない」(D1134)。これに対して遊説は、「私が群集に混じったり、街路を歩いたりすると、どの顔も輝きだし、あらゆる口が歓喜を叫び、すべての手が私に向けられるのだ」(D1137)と直接性と求心性を帯びた叙述を伴う。ダヴィッドの描いた「テニスコートの誓い」のように、テーブルの上に立って宣誓するバイイにすべての顔と片手が向かう(ただし、ダヴィッドは両手を胸にあてて陶醉するロベスピエー

ルと、椅子に座って身体をこわばらせ宣誓を拒む議員もひとり描いているのだが)。

このように、知識人が切り捨てられるのは、歴史的人物ド・ゴール將軍が国民大衆を魅惑する場で、知性を過信するがゆえにあえて不協和音を奏でるからである。一方、政治に敗北したシャルルは、マルローによれば「私」を語ることで生身の人間ではなくなって、すでに書かれた人物に似通っている。「彼の『回想録 [大戦の回想]』にはシャルルはいないが、彼と対話していてもそれほど変わらない」(M32/26)。ド・ゴールの『回想録』は、カエサルが『ガリア戦記』でしたように、みずからを三人称で語った点に独自性がある。それはナポレオンやミケランジェロがボナパルトやブオナロッチェでなくなったように、ド・ゴールが歴史上の人物になったからである。「ド・ゴール將軍はシャルルを止めてそうなるのだ。ひとりの人物は個人ではない、もっとよいものだ。おそらくそのため歴史が問題になると、將軍はことさらに自分のことをド・ゴールと呼んだ」(M57/46-7)。だから、対話していてもシャルルがいなくなったと感じられたのであろう。

歴史が問題になるとなぜ三人称になるのかをマルローの説明に従って理解しておこう。まず、マルローは將軍が在りし日の強烈な存在感を失っていること(「今日の彼には行動に対する奇妙な無関心がある」(M79-80/65))に注目する。

「私はヘミングウェイの『老人と海』の主人公だ。骨しか持ち帰らなかった」(M79/65)

この感想は、対話を終えて帰路に就いたマルローが、車窓から雪を眺めながら、「これが將軍の見納めになったのではないかと危惧」(M235/188)する最終場面でも繰り返される。それを危惧したマルローは、シャルルがフランスの国難にあってド・ゴール將軍となったように、失意のド・ゴールをふたたびテキストの中で歴史上の偉人に仕立て上げようとする。

マルローは「魂」について語るド・ゴールを、「將軍は宗教よりもずっと歴史に囚われている」(M104/86)と内心で分析し、「彼につきまとっている (l'obsède) 歴史とは、宿命というよりむしろ過去の現前

だ」と続ける。シャルルが、彼にも理解できない経緯で歴史と出会ってド・ゴール將軍になった過去が、今もそこにあるからである。

「(前略)しかし、歴史に対してはどうだろうか？きみはさっき、この語はその深さが多義性に由来するものひとつだと言っていた。けれども、私達がなしたことを理解しなくてはならない」

「あなたがなしたことを、です」

「私のしたことが、私がおの時にしていたことによって合点のゆく例は一度もない。特に6月18日がそうだ。

重要なのは——そしてこれはおそらく歴史に縛られたすべての人々に言えるのだが——私の言ったことではなく、私がおもたらし希望だ。世界にとって、私がフランスを再建したことになっているのは、私がフランスに希望を取り戻させたからだ」(M193/157)。

この部分では、「摂理の人 (homme providentiel)」という、神から使命を授かって登場する偉人の不可思議さを、かつてその役割を演じた人物が語っている。天命は脈絡なく突如、誰かの前に現れ、彼が人々に希望をもたらす。「歴史に縛られたすべての人々」とは、枢軸国に占領され、対独協力政権の下にあった当時のフランス人であり、すぐ後で言及されるように、「強制収容所にいた私達の仲間」である²¹⁾。ド・ゴールは、マルローの発した「重要なのは」という言葉をしばらくして引き取り、「永続するのは」という意味で使ったのか、と相手に質す (M196/159)。「永遠」について語りだしたド・ゴールに、マルローは、「彼はアンヌ [ド・ゴール夫妻の娘で故人] との散歩を考えているのだろうか」(M196/160) と、内心で呟いている。

ハイデガーの存在論を踏まえれば、わたしはわたしの死を死ぬことができない²²⁾。マルローは、かつて仕えたド・ゴールの遠からぬ死に際して、ド・ゴールという「わたし」がおのれを完成させ、自分の死を死ぬるように、未完の回想録に呼応して、会見記という作品を書いた。三人称の自己言及にあって、行動の責任主体は異議申し立ての場から遠く離れてしまう。このような人と言葉との超越論的關係に激しく抗ったのがブランショである。

4 ド・ゴールか、あるいは虚無か

ブランシヨは1940年代以降のフランス批評でもっとも重要だといわれるが、ド・ゴール体制批判を通じて、知識人とは何かを問い直してもいる。その思考と行動は、『問われる知識人』（1996）、『友愛のために』（2000）に結実する。だが、折に触れて発表し、このほど『政治論集』にまとめられた一連の文章においてすでに、文章の政治的功利性ないし使用価値とは別の知的探求が試みられていた。そして、安原伸一郎氏、西山雄二氏ら若い世代のブランシヨ研究者の仕事が、それぞれ1930年代と1950年代以降のブランシヨの政治と文学について多くの事柄を明らかにしている。

知識人が自己の存在理由を吟味するという意味で、ブランシヨの歩みはサルトルを思わせる。サルトルは一時期のフランス共産党への同伴（『コミュニストと平和』1952-1954）を経て、ひとまず自伝『言葉』（1964）でみずからの書く根拠を問い直し、次いで日本講演（1965）に基づく「知識人の擁護」で書くことの倫理的意義を掴もうとした。それによってサルトルは、『文学とは何か』（1947）、特に「1947年における作家の状況」によって宣言した趣の「参加（engagement）」の文学に、いくらか修正を加えようとしたといえる²³⁾。

ブランシヨがどのような思考を基礎にド・ゴール体制を批判したか、またブランシヨの思想と行動がフランス知識人の運動とどのように関わっていたかという、ふたつの重要な問いについては、すでにクリストフ・ピダンの画期的な伝記²⁴⁾と、『ブランシヨ政治論集1958-1993』の訳者解説に詳細な記述がある。小論は1958年のド・ゴール政権復帰の原因と結果を考察するために、これらの記述において重要視された三つのテキストとひとつの行動に注目して、前節でマルローが救い出そうとした「6月18日の男」に典型的な「摂理の人」としてのド・ゴール像を、ブランシヨがいかにして解体しようとしたかについて考えてゆく。

三つのテキストとは、まず『7月14日』誌第2号（1958年10月25日発行）に掲載され、文芸評論集『友愛』（1971）に再録された「拒否」である。次に、意図的に1959年の6月18日に発行された、同じ『7月14日』誌第3号掲載の「本質的墮落」である。最後に、共同制作されブラ

ンシヨはその第9稿から起草に加わった、いわゆる「121人宣言」である。これは1960年9月上旬に発表され、正確には「アルジェリア戦争における不服従の権利にかんする宣言」という。このテキストを掲載した出版物が発禁処分にされ、署名者を取り調べを受けたために、政治権力との争いが知識人の新しい行動につながった。これについては、研究書を参考にしながら、それらを踏まえてブランシヨの回想的なテキストを読んでみる。1984年にピエール・ノラの『ル・デバ』誌に発表され、『問われる知識人』（1996）として刊行されたテキストの末尾と、『友愛のために』で、「121人宣言」を回顧する箇所である。

前節で見たようにド・ゴールは国民大衆に語りかけようとする時に「6月18日の男」という將軍像を身にまとったが、ブランシヨはまさしくこのカリスマ的ド・ゴールに抗して知識人が何をなすべきかを考えた。「拒否」は、ド・ゴールが憲法改正を国民投票で問おうとしている1958年10月に発表されている。前月の9月4日、共和政治の破壊者にしてファシストだと非難されていたド・ゴール首相が、憲法改正を訴える場として選んだのは、第三共和制の基礎となった国防政府成立の日付と、その名もレピュブリック（共和国）という広場であった。ド・ゴールがそこで「若手」技術者に期待したこと、国民投票による新しい憲法体制の樹立に言及したことはすでに述べた。ブランシヨの批判は遅れてやってきていた。

「拒否する者ども、拒否の力によって結ばれている者どもは、まだ共にいるわけではないことを知っている。共に肯^{うべな}う時間は、彼らからまさしく取り上げられたのだ。彼らに残されているもの、それは不屈の拒否、彼らを結びつけ連帯させるこの確かで揺ぎない厳密な否（ノン）の友愛だけである。」（B. EP28）

マルローは引退した將軍との会見記で1958年9月4日の演説を回想し、野次は群集に飲み込まれていったが、広場に風船が上がり、垂れ幕に「ファシズムはここを通さないぞ」とあった、といわば演壇から述べている（M170/140）。ブランシヨは対照的に、対抗馬を立てられず、一致点も見出せず先に越されて広場に散在する側から言葉を発している。国民大衆を熱狂させているのがごまかしだという点に、否（ノン）の根

抛が置かれる。このテキストには註が付されており、そこには、「これはド・ゴール将軍が、今回はレジスタンスではなく傭兵たちに担がれて、権力に復帰した数日後に書かれた」(B. EP29)とある。ド・ゴールは議会の迷走に業を煮やして蜂起したアルジェリアの軍人たちから望まれて政権復帰した。ブランシヨは、それを忘れるな、と書いた。つまり、彼の批判は権力の本質に関わっている。

続く『7月14日』誌第3号掲載の評論は、邦訳で「本質的墮落 (La perversion essentielle)」と題されているが、これを「本質にかかわる倒錯」と解釈する。軍事権力が政治権力に転化し、政治権力が救済の権能を帯びて宗教的権威となったことを喜ぶ、およそ正常でない欲望のあり方をブランシヨが批判しているからである。ブランシヨは、ド・ゴールを信任し、それで主権を行使したと誇らしげな国民に、アイロニーをこめて語りかける。ド・ゴールの支持者たちは「彼をあらゆる異議申し立ての届かないところに祭りあげるあの主権者 (souveraineté) の使命を享受している」。だが、これは民主主義の自殺を意味する。市民自身が異議申し立ての封じ込めに加担し、投票行動と街頭での賛意を通じて為政者を「宗教的に高める (祭りあげる)」ためにその主権 (souveraineté) を行使した結果、権力の本質が倒錯を起こして専制的な君主権 (Souveraineté) を生み出したからだ。サルトルは1年前に「王様をほしがる蛙たち」と冷笑したが、ブランシヨは神から貰った肉食鳥に食われる哀れな人民を、冷徹に見据えて次のように言う。「きみたちは本質を裏切って何ひとつ救済していない。なぜなら、すべてであり何もなしえない (qui est tout et ne peut rien) 至高性の背後で、政治権力が救済の権能に墮するやいなや、きみたちはすでに潜在的に、やがてありありと、その後にやってくるあの独裁制を得るのだから」(B. EP41)

ブランシヨの書いた「何もなしえない」という言葉には注意が必要である。評論の前の部分には、ド・ゴールが体現した「摂理 [ないし神慮] の人 (homme providentiel)」という言葉の意味が、「摂理の、ということは神慮によって選ばれ、神慮として顕現するということだ。摂理の人が受任する権力はもはや政治権力ではない、それは救済の権能である」(B. EP34)と説明されている。ところが、ド・ゴール将軍がそのような人物として顕現したのは、ドイツ軍の猛攻に屈した1940年6月のフランス国民が「虚無」を覗きこんだ時だった。

「かつてフランスのあったところにはもはや空虚しかなく、この歴史の空虚の向こうに、ひとりの名も無く、顔も持たない人物のうちに持続する運命として、その救済のまさしく予言として、ほとんど目に見え感知できる顕現があった」(B. EP36)

ブランショが「ある不在の大国の目に見える現前」と書いているのを敷衍すれば、1958年以後の今もまた、国民は同じ惨状にある。すでに格落ちしたフランスを、あえて国際社会における大国に見せかけるド・ゴールに促されてそちらを眺めると、国民には摂理の人ド・ゴールか、あるいは虚無しか見えない。

この叙述はド・ゴールが最晩年の『希望の回想』で語った1958年5月の権力掌握を思わせる。ド・ゴールは政権を公に求めていたが、まだ首相に就任したばかりのフリムランがいた。ド・ゴールは5月26日夜、友人宅に首相を呼び出す。「私達は和やかに別れ、翌早朝、私はピエール・フリムランがまもなく、その夜に私が描いてやった決断をするだろうと確信して帰宅する」(D900)。首相の退陣は5月28日のことである。一方、ド・ゴールは、あたかもすでに政治権力を手にしたかのように軍に命令する。「こうして、パレ＝ブルボンの政策通と新聞編集部が私の即位 (avènement) にどのような〈正常化手続き〉がありうるかを思案するに任せて、軍指導者に新たな作戦行動の停止を言い渡す。彼らは実際にそうする。」(D900)ここに描かれたド・ゴールは、まさに即位した新王である。

軍事権力が政治権力に転化し、政治権力が救済の権能を帯びて宗教的権威となった時、市民は耐えがたいことを公民の義務として強制されるのではないか。ところが、この評論には、政権復帰したド・ゴールは何でもできるが何もしない、と書かれている。「誰もが自問していた、彼にできないことがあろうか、と。だが、驚いたことに(そして、無気力な安堵とともに)、人々は彼が何もしないと認めねばならなくなった。なぜなら、彼に属している権威は、あまりに高く、あまりに大きいので行使できない、ということの意味しているからだ。すなわち、ド・ゴールには何でもできるが、とりわけ何もせずいられるのだ (De Gaulle peut tout faire mais, en particulier, rien.)」(B. EP34)。それで「きみた

ち」は安心したのか、とブランショは問う。ド・ゴールは植民地を廻って独立後のフランス共同体結成を現地人の代表と合議し、やがて国民投票でいくつかの例外を除いて圧倒的な支持を得る。例外とは否決したギニアであり、選挙そのもののできないフランスの三つの県アルジェリアである。ド・ゴールが何もしないのなら、そして本当は何もできないのなら、市民はアルジェリア独立派との戦争に国民の「義務」として加担させられてしまう。それがブランショのいう独裁である。

「121人宣言」として知られる1960年夏の「アルジェリア戦争における不服従の権利にかんする宣言」は、こうして「正義」と「不正」、「権利」と「義務」、「国家」と「市民」を切り分ける作業を超越的為政者（至高性）から奪いかえすために、知識人に新しい行動の道筋を示した。宣言は、「植民地体制を決定的に破産させることに貢献するアルジェリア人民の大義は、すべての自由人の大義である」と結ばれていた。クリストフ・ビダンのブランショ伝に即して経緯を記す。

この宣言は共同制作された。アンドレ・ブルトンは第4稿に手を入れ、ブランショは第9稿から参加した。宣言はエリゼ宮を含む各地に送付されたが、ほとんどの新聞雑誌は事実上の戦争状態にあつて敵前逃亡を促すかに読めるその内容の過激さを恐れて掲載しなかった。白紙のページと宣言の末尾、そして署名者を列挙した『現代』は発禁となった。多くの署名者が司直の聴取を受け、賛同した映画人シモヌ・シニョレ、アラン・レネ、フランソワ・トリュフォーは仕事がなくなったという。宣言の署名者はまず、「不服従の教唆および抗命者の隠避」の嫌疑を受けたが、より重罪である「軍人の命令違反を教唆」したとして聴取されたのがモーリス・ナドーとブランショであったのは注目に値する。当局は出版人ナドーを「宣言」の実行者、ブランショを文章の主要な起草者と見なしていたらしい。この事件については「宣言」と尋問内容を記したブランショの回想がすでに翻訳されており、安原伸一郎氏の訳者解説²⁵⁾と西山雄二氏の博士号請求論文²⁶⁾に詳しい。小論では、ブランショが事件を回想してみずからの知識人論の糧とした部分を読み、またこの事件が『希望の回想』でどう語られているかに注目する。

「121人宣言」が出されたのはアルジェリア解放戦線に協力するフランス知識人が現れ、特にフランシス・ジャンソンの組織が検挙された時期にあたる。裁判は1960年9月5日に始まった。アルジェでは同年1960年

1月、独立に反対する入植者らがバリケードを築いた。FLN（アルジェリア民族解放戦線）を含む当事者をムランに集めるド・ゴールの提案は、すでに6月に失敗していた。「宣言」の「不服従」の呼びかけは、命令違反を犯した人々を「判断」ないし「裁く」（juger）人々にまず真っ先に向けられている。そして、流布を禁じられ、マスコミが報道を自粛したこの「宣言」は公判で言及されて有名になった。特にブラジルに講演旅行中のサルトルの手紙（じつは別人が書いてサルトルの了承を得たものだった）が披露され、「もしジャンソンがわたしに旅行鞆を運び、活動家を匿えと頼んでいたとしたら、そしてわたしがどうしても彼らの迷惑にならないなら、わたしはそうしたであろう」という表現が右翼の怒りを招いた²⁷。「サルトルを銃殺せよ」という「フランスのアルジェリア」の主唱者らの言葉に、知識人はペンもて剣に対抗する勇姿を見出したかもしれない。

ただし、ブランショがそこに見出したのは、権力の闘技場で為政者と一騎打ちするユゴーのような、そしてサルトルが『言葉』で自分自身を戯画化して描き出したような知識人像ではない。ブランショは抑圧される人々、抑圧する側で声なき声をあげた人々を、職業作家として代理表象する、つまり代わりに語るのではないような知識人の使命について、より困難な、文学的といってよい「自己同一」という言葉を使って言い表そうとする。それが『問われる知識人 考察のための草稿』の末尾の一節である。

「もし反植民地闘争を、知識人がそこで果たした役割を〈アルジェリア戦争における不服従の権利にかんする121人宣言〉に倣って思い起こすなら、このたびも宣言した人々が何らかの普遍的真理の先触れだとは言い張っておらず（中略）自分たちがしたわけではない決断をただ支持しようとしただけであり、その決断の責任をにない、その決断を余儀なくされた人々にただ自己同一しただけだと気づくのだ」²⁸

ブランショはサルトルが語った共同責任をそのように解釈している。これに反応した首相ドゥブレは表現の自由の尊重を為政者の務めと考えたが、ド・ゴールは噂によればそれをいなして「ヴォルテールを収監してはいない」と言った。大統領の言葉は、反愛国的な作家はヴォルテール

ルと違って刑務所に入れてよい、そして群小作家はヴォルテールとは違う、とも読める。ブランショはずっと後になって書いた『友愛のために』（2000）で、ド・ゴールの言葉を引き取って書く。

「旅行中のサルトルは帰国して、自分にもわたしたちと同じ資格で責任があると宣言した。彼は取り調べられなかった。なぜか？あまりに有名だったからだ。人々はド・ゴールが下したという噂の判決を知っている、〈ヴォルテールは収監しない〉と。（中略）ド・ゴールは、まさにヴォルテールが摂政 [ルイ15世の摂政オルレアン公フィリップ] に対する正当至極な風刺詩の咎でバスチーユに一年近く入獄したことを忘れている」²⁹⁾

ブランショらは確信犯的に宣言の集団制作に努め、また当時フランスに不在であった有名作家サルトルも共同責任をみずから求めた。しかも、ブランショの未発表タイプ原稿に見えるように、宣言が直接向けられていたのは徴兵された若者たちでも職業軍人でもない。「アルジェリア人民の大義」を「自由人」として是認し、あえて命令に従わなかった人々を判断し、裁く立場にある人々に、この宣言は「不服従の権利」ありと訴えていた。これはド・ゴールが首相着任早々、アルジェに赴いて、現地の人々に、「きみたちの言うことは分かった (Je vous ai compris.)」と言いながら行使し続けていた武力の正統性を疑う宣言だったのである。

ところが『希望の回想』に「121人宣言」への言及はない。ド・ゴールは同年11月4日の演説で、「アルジェリアのアルジェリア」について語り、反語的だが「自己決定」（民族自決）に言及するとともに、「もし権力の通常の流れでは不十分なら、わたしは国民投票によって直接人々に訴えることができる」³⁰⁾とさえ述べた。ド・ゴールが正式に国民投票の意思をフランス国民に伝えるのは、直後の1960年11月16日のことである。明らかにド・ゴールは独立派を牽制しながら、そして『希望の回想』で明言しているように（D979, 987）、サハラ砂漠での核実験の続行と石油資源の確保をアルジェリア独立承認の見返りとして死守する決意を固めて、言を左右にして世論を味方につけようとしていた。

むしろ、回想記作家は、「宣言」が発表された直後の1960年9月5日に行った記者会見を引用する³¹⁾。

「あちこちで声が聞こえる、〈問題を解決するのはド・ゴールだ、もし彼がしないのなら、誰もやらないだろう〉と。なるほど、それならわたしに自由にやらせてくれ」(D956)

過去を整合的に書きあげて歴史に旅立とうとする者にとって、知識人の声明は雑音でしかない。すでに引いたように、ド・ゴールが精力的に遊説をこなし、街路を歩くのを好んだのは、カリスマとしての自己を確認するためだった。知識人の批判的言説の届かないところに政治の言葉を隠すこと、街路から政治の言葉を奪い取って、自分を称える群集が「摂理」の政治家と交感する特権的場とすること、それがド・ゴールとマルローの望みであった。

したがって、会見記に見えるド・ゴールが、1968年5月の異議申し立ての後にも、「本人がどう思っているかと、ヴォルテールは理性よりもフランスに縛られている。知識人は意図によって情熱を燃やし、私達は結果によって燃やす。どうしたものかな。昼食会でもするか？」(M174-5/143)と、あからさまに知識人を軽侮するのは、為政者と知識人が同じ種類の言葉を使っているという自覚があったからだろう。

結論

ゴースムは「民の声は神の声」(vox populi vox Dei)に特徴づけられ、政治責任を国民議会に対して負わない。フランス人民にしか責任を負わないのである。ド・ゴールが創始した第五共和制は、憲法第16条で、国難にあつては大統領が議会も裁判所も超越できることを定めた。たえず「民の声」を聞き、フランス国民にとっての「神の声」を伝える義務を負う為政者は、さながら王権神授説の下でのフランス王のようである。文化大臣マルローはその祭司だった。

ブランショはアルジェリア戦争という国難に生じたそのような権力のあり方を「本質にかかわる倒錯」と批判し、共同制作による宣言文をもって対抗した。ラジオとテレビと遊説によってみずからの声を浸透させ、1968年5月の危機に際してはラジオ局のストライキに憤り、「もはや街路では何も起きてはならない」と宣したド・ゴールのような政治

家は、まだ世界に少なからず存在する。「自分たちがしたわけではない決断をただ支持しようとしただけであり、その決断の責任をにない、その決断を余儀なくされた人々に自己同一」(121人宣言)する知識人の役割について、小さな声で絶えず訴えたブランシヨの言葉は、いまなお傾聴に値する。

(本論文は平成22年度成城大学特別研究助成を受けた「出来事と批評言説の変容——戦争・ナショナルアイデンティティ・文学」の成果報告である)

註

- 1) Charles de Gaulle, *Mémoires d'espoir* in de Gaulle, *Mémoires*, Gallimard, 《pléiade》, 2000『希望の回想』(1970-1971)からの引用は本文中に原書ページを(D904)と記す。『希望の回想』のうち第1巻「再生」はド・ゴールが生前に公刊し、第2巻「努力」はタイプ原稿に著者自身が手を入れた第2章までが没後出版された。同書については拙論「ド・ゴールの未完の回想録における偉大さへの意志について」『成城文藝』第210号、2010年3月、を参照していただければ幸いである。
- 2) André Malraux, *Les chênes qu'on abat...*, Gallimard, 1971 新庄嘉章訳『倒された樫の木』新潮社、1971 以後、同書からの引用は本文に原書ページと訳書ページを(M34/27)と併記する。引用にあたり邦訳を参照しつつ自分で訳した。その責任が本論筆者にあることは言うまでもない。
- 3) Maurice Blanchot, *Ecrits politiques 1953-1993*, Gallimard, 2008; 『ブランシヨ政治論集 1958-1993』安原伸一郎・西山雄二・郷原佳以訳、月曜社、2005 訳書の定本はBlanchot, *Ecrits politiques Guerre d'Algérie, Mai 68 etc. 1958-1993*, Editions Lignes et Manifestes, 2003である。ガリマール版とはほとんど変わらず詳細な訳者解説を付す。引用にあたり評論の表題、訳語を行論に合わせて変更させていただいたが、その責任は本論筆者にある。同書からの引用は本文に原書ページを(B. EP25)と記す。
- 4) 教科書的な通史として下記が有益。Pascal Ory, Jean-François Sirinelli, *Les intellectuels en France, de l'Affaire Dreyfus à nos jours*, Armand Colin, 1992; Michel Winock, *Le Siècle des intellectuels*, Seuil, 1997 塚原史他訳『知識人の時代 バレス/ジッド/サルトル』藤原書店、2007
- 5) ベタンを元首として1940年7月にヴィシーに成立した政府は、欠席裁判でド・ゴールに死刑判決を下した。その後はヴィシー政府に対する米英およびドイツの思惑があり、またレジスタンス陣営における親ヴィシー派ジ

ロー将軍（アメリカが支持）との確執もあって国際的承認を得られなかったが、ついに「自由フランス」を第三共和制の正統な継承者とすることに成功した。というのは、ジロー将軍とともにアルジェで1943年6月に結成した「フランス国民解放委員会」（CFLN）が同年8月、連合国に正式承認されると、そこで実権を掌握したド・ゴールは、臨時政府の体裁を整えたからである。その頃、海外領土のフランス軍に依拠してレジスタンスを展開したド・ゴールは、国内レジスタンスにおける共産党の主導権をたえず警戒しながら、1943年5月、自身を議長とする「レジスタンス国民会議」（CNR）を結成して国内レジスタンスに対する影響力を得つつあった。この時、ナチ占領下のフランスに潜入してレジスタンス諸組織と交渉した功労者がジャン・ムーランである。1944年8月のパリ解放後、「フランス国民解放委員会」（CFLN）は名実ともに臨時政府となり、国政選挙を経て第一党の共産党、レジスタンスに参加したカトリック系民主勢力の「人民共和運動」（MRP）、そして第三党の社会党の三党連立でド・ゴールが首相になった。だが、政争を嫌ったド・ゴールは1946年1月に辞任し、三党連合で作られた第四共和制憲法は、議会に対する大統領の権限がきわめて弱いという意味で第三共和制の短所を引き継いだ形となった。

- 6) Charles de Gaulle, *Mémoires*, Gallimard, 《pléiade》, 2000 村上光彦・山崎庸一郎訳『ド・ゴール大戦回顧録』みすず書房、新装版全6巻、1999
- 7) 渡辺和行・南充彦・森本哲郎『現代フランス政治史』ナカニシヤ出版、1997、p.181『希望の回想』は選挙に勝利して第五共和制初代大統領として1959年1月8日にエリゼ宮に入った時の印象を「いたるところで凡庸さから懇請される時代にあって、わたしは偉大さのために行動せねばなるまい」（D909）と語っているが、反乱軍に復帰を懇請されたのは歴史の皮肉である。
- 8) Gisèle Sapiro, *La guerre des écrivains 1940-1953*, Fayard, 1999
- 9) Albert Camus, *Œuvres complètes*, III, p.308 この段落で言及された評論は、Camus, 《Ni victimes, ni bourreaux》, *Combat*, novembre 1946, repris dans *Actuelles, Chroniques 1944-1948*, Gallimard, 1950; Sartre, 《Orphée noir》, préface à Léopold Sédar Senghor (dir.), *Nouvelle anthologie de la poésie nègre et malgache*, Presses Universitaires, 1948, in *Situations*, III, 1949, pp.229-286
- 10) 「軽騎兵」と呼ばれ雑誌『パリジェンヌ』に集まったジャック・ローラン、ロジェ・ニミエらは政治的に右翼というより、伝統的に右翼文化に属する男性的価値、エリート主義、ナショナリズムを掲げ、対独協力を疑われていた作家シャルドンス、モラン、ジュアンドーらへの共感を表明してサルトル、カミュと対抗した。Ory, Sirinelli, *op.cit.*, pp.173-174 ロラン・バルトにはポピュリスト政党の使用言語を論じたエッセイ「ブジャードと知識人」がある。Roland Barthes, 《Poujade et les intellectuels》, *Mythologies*, Seuil, 1957

- 11) これまで論壇誌として名をはせた月刊の『現代』（1945）、『エスプリ』（1932）に加えて週間ベースの情報誌を兼ねた『ロプセルヴァトゥール』（1950）、『レクスプレス』（1953）が相次いで発刊され、レジスタンス時代に非合法誌として出発した『キリスト者の証言』もアルジェリア戦争を批判した。これらはパリ解放後に発刊された『ル・モンド』紙とともに「フランスのアルジェリア」派から敵視される。Ory, Sirinelli, *op. cit.*, p.200
- 12) カミュは『レクスプレス』誌上で、一度は不信任された（1955年2月）元首相マンデス・フランスへの支持を1956年1月の選挙で訴えた。「ぼくは共和戦線とマンデス・フランスの率いる候補たちに投票するつもりだ」（『レクスプレス』1955年12月30日、Camus, *Œuvres complètes*, III, p.1071）。この急進社会党出身の政治家は、カミュも世代的に属していた共産党、社会党、急進社会党という伝統的左翼運動とは異なり、国民に政策を直接訴える新たな手法でインドシナ問題を解決し、モロッコ、チュニジアの独立運動に一定の解決をもたらした（それゆえ既存勢力から警戒されて失脚した）が、それを支持したのは「アルジェリア戦争世代」ともいわれる若者知識人層だった。柴田三千雄『フランス史10講』岩波新書、2006、p.213；Ory, Sirinelli, *op. cit.*, p.196
- 13) サルトルは『レクスプレス』に1958年9月に発表した「王様をほしがる蛙たち」でド・ゴール派の愚かしさを痛烈に批判した（多田道太郎他訳『サルトル全集 シチュアションV 植民地の問題』人文書院、1969年）。初期の大統領は市長や地方議会議員など8万人の投票人によって選出された。1962年にド・ゴールが直接選挙による大統領選出を国民投票に訴え、今日の選挙制度ができた。第五共和制憲法の規定する強い大統領権限を権威づける狙いがあったと言われる。
- 14) Ory, Sirinelli, *op. cit.*, p. 202 書誌は註4）を参照。ド・ゴールは1959年9月16日、民族自決を容認する演説を行い、FLNに対話呼びかけた。
- 15) Charles de Gaulle, *Discours d'Etat*, Perrin, 1970（2010）, p.99, p.101
- 16) 完結した最初の回想録『戦争の回想』第一巻の題「呼びかけ（appel）」を、小論では旧約聖書の預言者を思わせる召命と解釈した。『希望の回想』では、アルジェの反乱を機にみずからの使命を知った将軍は、取るべき行動を演劇的に物語る。「私は潮時を選ばねばならない。影絵芝居を終わらせて、私が機械の神を出させる時を、言い換えれば私が舞台上上がる時を、である」（D894-895）。神慮による解決を観客に目撃させる「摂理の人（神に選ばれて人々を救済する人物）」を自作自演する決意が語られている。
- 17) フランス知識人はつねに分裂しつつ更新される。彼らはアルジェリア問題が1962年に決着するとアメリカのベトナム北爆開始（1965）を契機に第三世界、そして中国に関心を寄せ、1968年5月の過激主義を経て、パレスチナ難民を擁護するようになる。拡大の一途の大学では、部数を伸ばした

情報・論説誌や新聞を通して、年長世代の議論が浸透する。体制派のマルローはもちろん、「68年5月」に学生たちと行動しながらパンフレットを書き、またイスラエルを支持し続けたブランショは、そこでも例外的な存在である。

- 18) *Discours d'Etat*, p.73
- 19) 最初はレジスタンス時代、次は戦後まもなく下野したいいわゆる「砂漠行」の時代、そして辞任後である。有田前掲論文第2章「ド・ゴール將軍の復帰」を参照。
- 20) M34/27マルローはラス・カーズの『セント・ヘレナ島回想録』を引いて完成を強く勧める。「あなたが『回想録』をお書きになる必要があるとわたしが考える理由はそれなのです。そうでなければ、他の誰かが書かないとお思いですか？」(M74-75/60)
- 21) 『倒された樫の木』でド・ゴールは、収容所で衰弱死したシュルレアリスムの詩人ロベール・デスノスの名を挙げて、「立派に死んだ」(M173/141-2)と言う。それは詩人への共感を表すというより、「どうして知識人はもはやフランスを信じないのだろうか」とマルローに尋ねるためだった。
- 22) ハイデガー『存在と時間』原佑訳、中央公論社、1980、第一章第四八節を参照した。
- 23) ブランショは『問われる知識人』巻末でサルトルの変化に触れているが(p.58)、すでに1960年代初頭に『国際雑誌』を準備する過程で、「〈サルトル的参加〉という単純化した名で知られる、1945年以降の文学と公共生活との関係」(EP108)との距離について語っている。
- 24) Christophe Bident, *Maurice Blanchot Partenaire invisible*, Champ Vallon, 1998
- 25) 「文学の力——シャルル・ド・ゴールに反対するブランショ」註3) 参照
- 26) 『異議申し立てとしての文学 モーリス・ブランショにおける孤独、友愛、共同性』御茶の水書房、2007 ド・ゴールとブランショの関係については、「文学の絶対的な敵 ド・ゴールに抗するブランショ」(『現代詩手帖』特集版「ブランショ——生誕100周年」pp.316-329)も参照した。
- 27) Bident, p.400
- 28) Blanchot, *Les intellectuels en question*, fourbis, 1996, pp.60-61
- 29) Blanchot, *Pour l'amitié*, farrago, 2000, p.25
- 30) *Discours d'Etat*, p.104
- 31) ド・ゴールの叙述と異なり、会見後に質疑応答があった。語句はほぼ同一。